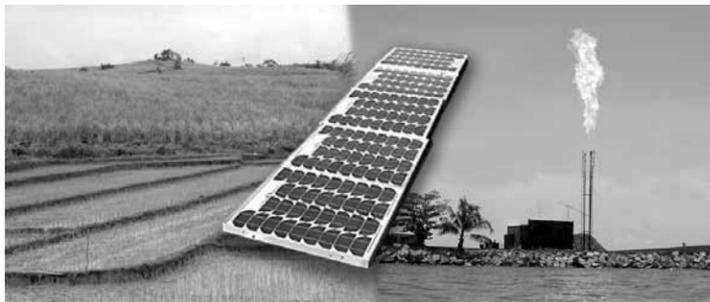


特集

エネルギーをわが手に!

もうひとつの電気のために土地を、海を奪われるのはごめんだ

エネルギー開発とは一体どういうことかを端的に示したのが福島第一原発の暴走だった。地元福島の人びとのためではなく、首都圏の人のためにつくられ、暴走した原発。地元には被曝と放射能と地域と家庭の崩壊が残された。アジアで、世界で、同じことが起きている。フィリピンではバイオエタノールのための農業開発で農民が、インドネシアでは天然ガス開発で漁民が、土地・海を追われている。世界各地で自然エネルギーによる地域の自立を呼びかけ実践してきた桜井薫さんは、こうした状況を踏まえて自前の技術と仕組みづくりを具体的に提案する。(編集部)



ソーラーネットは、小型太陽電池(40W以下)を手づくりする技術を、伝え・普及する活動を15年ほど続けてきました。インドネシアの未電化地域への支援が中心ですが、最近では、世界各地で根を植えていくスタイルへと変わっています。国内では、「爺柴プロジェクト」と名づけた出前講習会を展開しています。5年で100カ所近くをまわり、10000人を超える人びとが160枚以上の太陽電池を製作しました。爺柴の名前は、「むかしむかし、お爺さんとお婆さんが…」という桃太郎から借りました。その昔、お爺さんの集

《国際協力NGO ソーラーネットのwebsite》 <http://solar-net.org/>

エネルギーを自分たちの手に取り戻す — 手づくり太陽電池から見えるもの

桜井薫 / さくらい・かおる
国際協力NGO ソーラーネット代表

原発や化石燃料は、大量生産・大量消費という経済の仕組みを支えてきました。同時に「都市と田舎」「南北格差」をつくりあげま

した。巨大資本とブラックボックスに納められた「高度技術」を握る数%の富裕層と、ボトム・オブ・ピラミットの99%の層をつくり

「有機農産物=安全な食品、付加価値のつく商品」という理解が広まるなか、ロバ農園では、CSA

「Community Shared Agriculture (社区互助农业)」と言い換えようという議論がされています。日本語にしたら「地域で分かち合う農業」といったところでしょうか。生産者と消費者とが仕切られていて、それぞれの利害にのみ関心をもち、生産や流通の過程で生じるリスクやコストを分かち合い、互いに理解を深めていくような関係を築く。「社区互助」という言葉には、このような含意があります。そして有機農業は、こうした相互的な関係づくりの媒介として位置づけられているのです。工業型農業とアグリビジネスの食料支配が地球規模で展開される一方、ロバ農園の例にみられるように、有機農業を通して人々とのつながりを創り出していきたいという思いもグローバルに広がっています。

12月16日には法政大学市ヶ谷キャンパスで国際有機農業映画祭が開かれます。こうした思いをもつ人びとの集いの場になればと考えています。

詳しくは、<http://blog.yuki-eiga.com/>

り続けています。私は、20世紀末から、この国で膨らみ続けてきた問題点に通底しているのは、「今ある文化・経済構造は自分たちの暮らしにそぐわない」ということではないかと思っています。3.11以降その認識は、より一層、強く解決を求める運動の形となって広がっているようです。

原発から自然エネルギーへの変換は、単に暮らしを支えるエネルギーの種類が変化するだけではありません。人任せにさせられて自分たちの暮らしを、自分たちが決定できる範囲内に据え直す社会変革が、共にすすんでいくということです。たとえ自然エネルギーの施設であっても、大きな資本が地元とは無関係に「握りの地元ボスを抱き込んで」設置するのであれば、新しい形の中央への依存が生まれるだけです。

昔話とめざす近未来

中国での実践「社区互助」

安藤文将 / あんどう・たけまさ
国際有機農業映画祭事務局、APLA 評議員

夏の暑い盛り中国へ行ってきました。北京空港にて私を迎えてくれた友人は、「小さなロバの市民農園(以下、ロバ農園)」で働いています。北京郊外にあるロバ農園は、中国で最初にCSA (Community Supported Agriculture = 地域で支える農業)を実践した農場として知られています。ロバ農園では、北京在住の契約消費者に有機農産物を届けると同時に、将来、農業や生協など食に関わる仕事に携わりたい若者に実習の場を提供しています。今、中国では、食の安全に対する不安が広がるなか、ミドルクラスの間に有機農産物の人気が高まっています。実際、私が見た北京市街のファーマーズ・マーケットでは、ロバ農園の野菜が飛ぶように売られていました。企業も付加価値がつく有機農産物に注目しています。ネットゲームを中心に莫大な利益を上げている九城ネット販売集団が有機農産物のネット販売に乗り出したのは、その一例といえます。

「Community Shared Agriculture (社区互助农业)」と言い換えようという議論がされています。日本語にしたら「地域で分かち合う農業」といったところでしょうか。生産者と消費者とが仕切られていて、それぞれの利害にのみ関心をもち、生産や流通の過程で生じるリスクやコストを分かち合い、互いに理解を深めていくような関係を築く。「社区互助」という言葉には、このような含意があります。そして有機農業は、こうした相互的な関係づくりの媒介として位置づけられているのです。工業型農業とアグリビジネスの食料支配が地球規模で展開される一方、ロバ農園の例にみられるように、有機農業を通して人々とのつながりを創り出していきたいという思いもグローバルに広がっています。

12月16日には法政大学市ヶ谷キャンパスで国際有機農業映画祭が開かれます。こうした思いをもつ人びとの集いの場になればと考えています。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。



CONTENTS ■ HALINA 18 2012.11.01

02	Relay Essay ポコポコ⑱ 中国での実践「社区互助」◎安藤文将
03	【特集】エネルギーをわが手に! — もうひとつの電気のために土地を、海を奪われるのはごめんだ エネルギーを自分たちの手に取り戻す — 手づくり太陽電池から見えるもの◎桜井薫 【フィリピン】原料調達現場で起る土地収奪に無策の日系事業者 — フィリピン・バイオエタノール事業◎波多江秀枝 【インドネシア】日本のLNG開発で崩壊した「海の民」の暮らし◎佐伯奈津子
8	【Topics】「改定」入管法と在日外国人◎佐藤信行 成長と一体を五感で感じた1週間 — クリーンコブ青少年ネグロス体験ツアー報告◎赤石優衣
10	【Column】水俣と日本の今⑥ 未来のために過去を振り返る — 生きる希望をつくるために◎原田利恵 マイスター in ジャパン⑥ 【ルーマニア】テオドラ・ミハイさん 仙人の雑談・濫読⑥ 大地の回復に思いを馳せて◎秋山真児 Have you ever seen the Cinema?⑦ 『山猫』◎重政栄一郎
12	撮っておきアジア⑱ 東京都新宿区、新大久保◎藤原絢香
13	APLA生活⑱ エコシュリンプの20周年を記念してロゴをつくりました!◎荻沼民
14	【Voice from APLA partners】 【ネグロスより】カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)とオルター・トレード社(ATC)がバナナ生産地の地域多様化にむけて活動開始 【パプアより】パプア産のカカオを題材にしたブックレットとDVDが完成
15	事務局だより

表紙のことば

この布は、ベトナム・ホーチミン市に初めて旅行に行った際に購入したものです。テザインとしっかりした生地が気に入りに購入したものの、使い道が分からずに帰国後、ずっとタンスに眠らせてしまっていたので、今回こういう形で命を吹き込んで頂いてとても嬉しいです。ベトナムは、人の優しさに溢れており、そしてどこか昔の日本の姿が感じられる国です。雑貨のかわいさや料理の美味しさからも、特に女性に人気のある旅行先として選ばれています。同時に、最近の目覚ましい経済発展で注目されている国でもあります。この生地をきっかけに「ベトナムってどういう国なんだろう」と、少しでも興味を持って頂けたら幸いです。(大久保なみ)

めた柴は、カマドにくべられました。今ならどうなるでしょう。集会所に設置されたソージェネレーションの燃料となり、地域一帯に供給される熱と電気にする事ができるかもしれません。ソージェネレーションを動かしているのは、息子だったり、孫だったりします。エネルギーが余れば、柱材の乾燥に使われたり、トマトの加工工場を動かせるかもしれません。桃太郎のお話は、私には昔話ではなくて、私たちがめざす近未来の話に思えるのです。この話のポイント

は、地域の人がエネルギー源と、その利用技術を自分たちの手に取り戻している点にあります。

現地NGOや市民団体に太陽電池の作り方を伝授(ハイチ)。



もし、それに不都合があれば、みんなで引き返すことも可能です。

手づくり太陽電池・海外へ

手づくり太陽電池の技術は海外の途上国向けに開発されました。スト

リートチルドレンやDVから逃れてきたお母さんたちの仕事作りとして考えられているものです。

出前講座ができるくらいですから、大きな施設は不要。初めてハングドてを握った方も、5、6人くらいで、一日でつくりあげることが出来る簡単な技術です。どちらかというと、女性の方が上手です。製作する機械も複雑なものではないので、職業訓練校レベルならば、つくることが出来ます。

これまで、日本で手づくりされた太陽電池は、電気を必要とするアフリカや東南アジアの未電化地域などに届けられました。ルワンダの学校ではパソコンと明かりの電源になり、パレスチナでも活用されています。携帯の充電や、無



シングルマザーを対象とした職業訓練校での、技術移転の様(ニカラグア)。



10年以上前にインドネシアのNGOが作った太陽電池を、未電化地域で設置している様子(インドネシア)。

線機の電源にもなっています。

使いこなす技術も、それほど難しいものではありませんが、技術を地元で根付かせることは、かなり気長な活動が要求されることも事実です。他方、最近ではわが国とは比較にならない早さで、太陽電池の技術が途上国で広がっている話も聞きます。結構、刺激的な事業になるかもしれませんね。

使いこなす技術から、一歩、自分たちでつくるどころに歩みを進めるNGOも、ニカラグア、ハイチ、インドなどで、この2、3年で増えてきました。まだ技術移転の段階で、現地の人たちによる持続的な経営を始めているところはありますが、それほど遠くないうちに、スタートできると思っています。

もうひとつの新しい仕組みを

ご承知の通り、現代は利潤を得ることを目的にして、資本と技術を集約する企業が、経済・流通の基本となって成立しています。しかし、それは決して永遠のスタイルではないはず。99%の大多数にとつて、適切な、もうひとつの道があるというのが、私の考えです。その骨子は以下のようになると考えています。きちんとした

技術を伝えるNGO(技術の公開、安く良質な資機材を供給する協同組合(原価の公開と物流の共有)、地元の人びとに資金を提供する市民のファンド(資金の公正化)、本当に暮ら

しに必要なものを産み出し、取込んでいけるコミュニティの存在(需要と供給が共鳴する市場)です。自然エネルギーが普及し、原発が止まっていくことは、こうした新しい

仕組みが一緒になって育っていくことに他なりません。別な言い方をすれば、育てていくことを、市民一人ひとりが社会から求められている状況になった。この国はよ

うやくその段階まで成熟してきたのかなど最近は感じています。■
(注)発電時に発生した排熱を利用して、冷暖房や給湯などに利用する熱エネルギーを供給する仕組みのこと。

レポート Report

フィリピン / Philippines

原料調達現場で起きる 土地収奪に無策の日系事業者

—— フィリピン・バイオエタノール事業

波多江秀枝

／はたえ・ほづえ

国際環境NGO FoE Japan 委託研究員

「自分はこの土地で生まれた。だから、ここで死ぬんだ。最後の一息まで、この土地を守り抜く」。こう力強く語ったのは、先住民族カリンガの青年だ。家族が育ち、米、トウモロコシ、バナナ、野菜、果樹などを数十年にわたり耕作してきた先祖代々の土地を譲らない決意は固い。

バイオエタノール事業と 土地収奪

再生可能エネルギーとして世界的関心が集まるバイオ燃料だ

が、その開発に伴う「ランドラッシュ(土地収奪)」や「食糧危機」の問題は、フィリピンの農村に暮らすこの青年らにとっても他人事ではない。現在、伊藤忠商事と日揮が主体となりフィリピンで最大規模のバイオエタノール製造・電力供給事業を進めており、その現場であるイサペラ州(首都マニラから北東約300km)では、バイオエタノールの原料となる砂糖キビの栽培に1万1000ha(東京ドーム2353個分)の農地が必要とされているからだ。

当初、事業者は、遊休地を土地所有者から借り上げ、砂糖キビ栽培を進める方針を示していた。しかし、2009年から砂糖キビ栽培が開始されると、地元の農民や先住民族が数十年耕してきた田畑が、彼らの合意なしに、第三者の名義でバイオエタノール事業者に賃貸されてしまう事態が多数報告された。

フィリピンでは費用を賄えず法的な土地登記の手続きができない、あるいは、農地改革の遅れから土地の法的所有権を持たない農民が依然として多くいる。同事業で土地賃貸料を稼げると見込みんだ地元の有力者らは、そうした農民の耕作地で土地権利書を偽造。農民の知らぬ間に、事業者が土地を貸し出しているのだ。水田やトウモロコシ畑がすでに砂糖キビ栽培地に転換されてしまった場所もある。

地元農民たちの抵抗

冒頭で述べた青年の農地も同様に、ある地元有力者が勝手に事業者と土地賃貸契約を結んでしまった。彼が抵抗し、同農地での耕作を続けようとする、地元有力者や警察からの嫌がらせに遭い、銃の発砲など命の危険を感じることもあった。

それでも、昨年、「事業者のトラクターが自分たちの農地を整理しに来る」という情報が飛び込んでくると、青年は自分と同じようにトウモロコシ畑を砂糖キビ畑に転換させたくない近隣の農民約20人に呼びかけ、耕作地の周囲に抗議の立て看板を並べた。彼らの生きる糧であり、「命」そのものと言っても過言ではない「土地」が収奪されれば、家族の生活が立ち行かなくなってしまうからだ。その日は青年らの先手が功を奏し、



写真の女性の夫は、朝4時から16時まで漁に出たが、獲れたのは魚1尾だけ。5000ルピアで売るか、自家消費するか、魚を前に女性は悩む。

は「第二の家」。「サンゴ礁のおかげで村から大学生が出た」と語られるように、村に恵みをもたらしてきた。

しかし、このサンゴ礁に建設された石油・ガス採掘基地で、2005年に原油採掘がはじまり、村の暮らしは崩壊した。それまで7つあった集魚場が2つに減るほど、漁獲量が落ち込んだためである。

困窮する海の民の暮らし

「夫が朝4時から夕方4時まで漁に出たけど、獲れたのは魚1尾だけ。売っても5000ルピア約40円」とため息をつく女性は、家計を助けるため、朝4時から10時間ほどかけて、手こぎ舟でサゴヤシの葉を採りに行き、屋根を編んでいた。3回サゴヤシの葉を採り

に行つて、つくれる屋根は1000枚ほど。1枚500ルピア(約4円)で売る。

より沖合に出ないと魚が獲れないのに、漁民のほとんどは収入が激減して燃料を買えない。燃料を買い取る人の漁船が、ロープで数隻の漁船を引っ張って漁に出る。漁に出ても日々の食費すら稼げない。塩、食用油…最低限の現金のために、人びとは、高利貸しから借金せざるを得なくなった。高い手数料と利子を払えないと、高利貸しは家財道具を差し押さえる。サンゴ礁の恩恵で豊かだった当時に買った電化製品、金ほもちらん、皿や洋服なども家庭から消えた。

人びとは2007年から損害賠償、職業訓練などを求め、会社からの約束をとりつ

けたが、何度も裏切られてきた。2011年8月、人びとの不満は爆発した。現金が必要となるレバラン(断食月明けの大懇前)で、困窮感が募っていたのかもしれ

土地所有権の不正を証明するためには、多大な労力・費用を払っているのは、被害を受けている農民側だ。町や州庁舎、時には、イサベラ州からバスで10時間以上かかる首都マニラまで出向き、関連政府機関で必要書類を取得しなくてはならない。個々の農民にとって、交通費も時間も馬鹿にならない甚大な負担だ。

それに比し、事業者は農民が持ち込む苦情や書類を受動的に「待つ」のみで、その間も、農地での砂糖キビ栽培、つまり、営利活動

を続けている。被害農民にとっては、非常に理不尽な状況だ。「事業者は農民の苦情にもっと真摯に対応すべき。地元有力者に都合のよい調査ではなく、公正な調査が必要だ」。問題の解決を求める抗議活動を何度も行なってきたイサベラ州農民組織(DAGAMI)代表のジョニー・ヤダオ氏は、こう指摘する。「日本企業は現地のパートナー企業に情報・対応を依存するのではなく、地元住民の声を直接聞き、問題解決に自ら取り組むべきだ」。



バイオエタノール事業者の本社前でのDAGAMIによる抗議活動『イサベラ州の住民にとって災いの種である伊藤忠、日揮、GFI、ECOFUELのバイオエタノール事業を中止して! 外国企業による広大な土地の収奪を止めさせよう!』などと書かれた横断幕を掲げ、問題を訴えるイサベラ州の農民ら。(2012年3月/FoE Japan撮影)

トラックターによる整地は行なわれなかった。しかし、彼らの農地にもう事業者が来ないという保障はどこにもない。

事業者の対応と地元の負担

国内外のNGOから、こうした

緊迫した農地収奪の状況を指摘され、事業者は、「土地所有権の法的状況が曖昧な土地では契約しない」との見解を示し、契約後でも問題が発覚したケースに関しては、契約を破棄する方向性を示した。しかし、命をかけて土地を守り、

土地所有権の不正を証明するためには、多大な労力・費用を払っているのは、被害を受けている農民側だ。町や州庁舎、時には、イサベラ州からバスで10時間以上かかる首都マニラまで出向き、関連政府機関で必要書類を取得しなくてはならない。個々の農民にとって、交通費も時間も馬鹿にならない甚大な負担だ。

それに比し、事業者は農民が持ち込む苦情や書類を受動的に「待つ」のみで、その間も、農地での砂糖キビ栽培、つまり、営利活動

を続けている。被害農民にとっては、非常に理不尽な状況だ。「事業者は農民の苦情にもっと真摯に対応すべき。地元有力者に都合のよい調査ではなく、公正な調査が必要だ」。問題の解決を求める抗議活動を何度も行なってきたイサベラ州農民組織(DAGAMI)代表のジョニー・ヤダオ氏は、こう指摘する。「日本企業は現地のパートナー企業に情報・対応を依存するのではなく、地元住民の声を直接聞き、問題解決に自ら取り組むべきだ」。

レポート Report

インドネシア/Indonesia

日本のLNG開発で崩壊した「海の民」の暮らし

佐伯奈津子/さえき・なつこ
インドネシア民主化支援ネットワーク(NINDJA)

「何だ、お前らは!」
中スラウェシ州モロワリ県マモサラト郡コロ・パワ村の人びとと漁船に乗っていた私は、インドネシア海軍のスピードボートで追いかけられたうえ、M16銃を向けら

れた。村の沖合にあるティアカ石油・ガス田に接近しすぎたからだ。コロ・パワ村に住む人びとは、バジャウと呼ばれる海の民である。海上家屋に住む彼らの生業は漁業だ。村の沖合20kmにあるサンゴ礁

ない。石油・ガス採掘基地での平和的なデモは緊迫していった。どこからともなく火の手があたり、爆発を恐れた人びとは、漁船で村に逃げようとした。これを警察機動隊が追い、無差別に発砲する。2人が死亡、8人が負傷したほか、逮捕者も出る惨事となった。

私が村を訪れた2012年3月、海軍と警察が石油・ガス採掘基地を警備しており、漁船の接近を許さなかった。近づいた私たちは捕らえられ、1時間にわたって事情聴取を受けた。以前は国境も関係なく漂海していた村のバジャウは、今、村の沖合ですら自由に漁をできない。

インドネシアのLNG開発には、日本が大きく関与してきた。1974年3月、日本とインドネシアの間で、天然ガス開発借付560億円に関する交換公文が締結され、開発費用からプラント建設、さらに輸入までを日本が賄った。以来、インドネシアは、そのLNGの約60%を世界最大のLNG輸入国である日本に輸出してきた。

しかし40年近くたった現在、既存ガス田からのLNG生産は頭打ちとなり、一方でインドネシア国内のエネルギー需要はますます増加している。国内向けの供給を優先させるとしながらも、外貨を獲得したいインドネシアと、エネルギー安全保障の確保のためLNG輸出力の増加を求める日本の思惑は、新規ガス田の探鉱・開発に向かっている。

日本とインドネシアの天然ガス開発

ティアカ石油・ガス田は、三菱商事が2011年1月に権益を獲得したトイリ・スノロ天然ガス鉱区に位置する。原料ガスは、やはり三菱商事が44.9%出資する会社によって液化され、2014年から九州電力や中部電力に売却される計画だ。インドネシアでは、四番目の液化天然ガス(LNG)プロジェクトとなる。

電気のないコロ・パワ村では、夜になると東南の空が真っ赤に染まる。石油・ガス基地の火だ。「嫉妬の火がみえるから、早く扉を閉めて」。

インドネシアと日本の国益の陰に、バジャウの人びとは「嫉妬の火」への恨みを抱えて暮らしている。

「改定」入管法と在日外国人

佐藤信行／さとうのぶゆき
在日韓国人問題研究所（RAIK）所長

1 980年代後半から、日本の高度

経済成長と労働力不足によってアジアと南米からの移住労働者・国際結婚移住者が急増した。その結果、日本に住む外国人は、2010年末現在、213万人となり（この他に、非正規滞在者が約7万人、その出身国数は191に及ぶ。日本社会は今、「多民族・多文化」化が急速に進行しているが、諸外国で設けられている基本的な人権法制度が未整備のままである。韓国では、ここ10年で国内人権機関（2001年）、永住外国人の地方選挙権（2005年）、外国人基本法（2007年）、国際結婚家族への支援法（2008年）、重国籍の部分的容認（2010年）を実現してきた。しかし日本では、いずれも実現していない。

外国人制度の全面的改編

2012年7月9日、「外国人登録法（外登法）」が廃止され、「出入国管理及び難民認定法（入管法）」、「日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法（管特例法）」、「住民基本台帳法（住基法）」の改定法が実施された。

これまでの外登法では、日本に90日以

上滞する「すべての外国人」を対象にしてきた。ところが、今回の改定法では「中长期在留者」というカテゴリー分けをし、在日外国人を分断して管理する制度を作り上げた。

改訂法による在日外国人のカテゴリー

1 特別永住者	戦前から住む旧植民地出身者とその子孫
2 中长期在留者	3カ月を超える在留期間を認められた外国人
3 非正規滞在者	超過滞在者など

改定入管法では、「外登証」に替わる「在留カード」の受領・携帯・提示義務を、刑事罰をもって16歳以上の中长期在留者（約170万人）に強制する。これまで外登法が特別永住者を標的にしたように、改定入管法は中长期在留者の日常生活を監視し取り締まる。

煩雑な義務規定、加重された罰則

改定入管法は、中长期在留者に対して、煩雑な義務規定を設け、かつ重罰を定めている。それは、外登証を廃止して在留カードとするため、外登法における種々の義務規定と罰則制度を、そのまま入管法に持ち込んだためである。そのため外国人は、在留カードの更新や、配偶者と

の死別・離婚、所属機関を変更した際に変更届出を14日以内に地方入管局にしなければならず、さらに居住地変更の届出先は市区町村にしなければならぬ。

このように煩雑な新制度を、ニューカマーである外国人が十分に理解して履行することは不可能で、多くの外国人が意図的な届出拒否ではなく、制度を知らずに「法違反者」になる事態が生じることになる。しかも、居住地の変更届出を14日以内にしなかった場合は「住基法での行政罰…5万円以下の過料」と「入管法での刑事罰…20万円以下の罰金」となり、それが90日を超えると「在留資格の取り消し」となる。このように加重された罰則制度は、外国人に対する悪意に満ちた制裁である。

締め出される非正規滞在者

これまでの外登証に「在留の資格なし」と書かれていた非正規滞在者は、改定入管法・住基法では在留カードが交付されず、住民票も作成されない。さらに改定入管法では、「雇用主が、非正規滞在の外国人であることを知らずに働かせていた」こと自体に対して罰則を科すようにした。すなわち雇用の際、雇用主に在留カードに記載された「就労制限の有無」を確認するよう義務づけ、就労資格を持たない外国人を働かせていた場合、雇用主を罰することができるようにした。そうすると外国人は在留カードなしに、日本で労働も生活もできないことになる。

結局のところ、非正規滞在者を日本社会から締め出させてしまうのである。

改定法に見る法務官僚の「外国人観」

この改定法は2009年7月に公布され、3年の準備期間が設けられた。しかし法務省も総務省も、この間、法改定の概要をホームページやリーフレットで広報するだけで、外国人に課す各種義務規定とその違反に対する罰則について、具体的かつ平易に知らせようとする努力をほとんどしなかった。

法務省はここ10年、「ルールを守って国際化」という標語を掲げているが、外国人にとっては「守るべきルール」を知らされないまま、法改定を迎えたことになる。このことは、官僚の頭の中では、「完璧な管理・監視システム」だけが描かれていたことを示している。在留カードの記載事項に「就労制限の有無」がある。このような項目を設けて特筆することとは、外国人を「人間」「生活者」として扱うのではなく、「労働力商品」がどうか、という発想に基づくものである。

ニューカマーの高校生の場合、満16歳の誕生日までに学校を休んで地方入管局へ行き、在留カードを受領しなければならぬ。カードには「就労不可」あるいは「就労制限なし」と記載され、修学旅行時を除いて日本への再入国のたびごとに指紋と顔写真を登録させる。それを16歳の子どもたちに強いる国家と社会は、それこそ醜悪である。■

成長と一体を五感で感じた1週間

グリーンコープ青少年ネグロス体験ツアー報告

赤石優衣／あかいし・ゆい
APLA事務局

2012年7月26日〜8月2日、ネグロスと日本の青少年による「グリーンコープ青少年ネグロス体験ツアー」が実施された。ネグロスの山奥で朝から晩までワークショップを通じた交流をし、最後にひとつの劇をみんなで作り上げる。参加者は、日本の高校1年生〜3年生と、ネグロスの若者たち13〜26歳で、互いに男子5人女子6人の合計22人のグループとなった。

当たり前だけでなくとても大切なこと

私にとってこの1週間は、APLAに勤めてからの4カ月間と同じくらいの濃さだった。移動などを除いた正味4日間で15種類以上のワークショップを実施したが、どのワークショップも、今まで頭では理解していたであろう「当たり前」なことを、子どもたち全員が心身で実感できる内容となっていた。

例えば、ある伝言ゲームでは、自分ではちゃんと伝えているはずなのになぜか相手にうまく伝わっていないことが多々あった。そこから、人に何かを伝える時には、相手の目をしっかり見て、はつき

りと話さないと伝わらない、聞く側も相手の声に集中して耳を傾けなければいけない、さらに、気持ちや動きを加えることで、はじめて言葉が「伝わる」のだと気づいた。

別のゲーム「ネクストライフ」では、将来生まれ変わりたいものを各自が考え、その生まれ変わりと関係している人を順番にゴム糸でつないでいった。そのつながれた形は、一人でもゴムを手から離したらぐちゃぐちゃになってしまう。そして、一度崩れてしまったら簡単には元の形に戻せない。誰かがゴムを離すと、みんなの手にゴム糸が跳ね返り、その痛さから、相手から手を離されるとすごく辛いということも体感した。そこから、私たちはこの世に存在するありとあらゆるものと関連性を持って生きていること。それは自分が注意していないと簡単に壊れてしまい、誰が欠けてもこの関係性は成り立たないこと。そして未来のため、この関係性をつなぎつづけていなければならぬということも学んだ。

ツアーの終盤で行われたキャンドルナイトでは、輪になって、一人ずつ今まで

胸にしまいこんできた悩みや感情を話していった。お互いを信頼しているからこそ話せる仲間心の内を聞くことができ、ワークショップで見ることができた個々の変化とは別に、「グループ」としての変化を見ることができた。悩みも辛いこともすべて涙で流したおかげでできあがった、軽くて清々しい雰囲気、友達を越えた家族のようなみんなの笑顔、言葉では表せないあの子どもたちの一体感は今でも忘れられない。

子どもたちが創りだす未来

日に日に仲良くなり、変わっていく子どもたち。その姿を見ていて、APLAは、本当に国境を越えた人びとの関わりを創っているのだと感じた。頭ではわかってはいたが、子どもたちの笑顔と彼／彼女らが作り出す空気、そしてみんなで協力してつくり上げた素晴らしい劇から「人びとの関わりを創る」ことがどういうことを学んだ。つくる人、食べる人がどういう人

かを知るだけではなく、実際関わりあう事で一方的ではない「共に支える」という気持ちが生まれ、行動に移すことができる。そして、今まで人びとの関わりを大切にしてきたからこそ、20年以上も民衆交易が続いてきたのだと思う。今回のツアーには、ネグロス側から、複数のパ



関係性の大切さを学んだネクストライフ。

ランゴンバナナ生産地域の子どもたちも参加した。日本とネグロス間の関係性だけでなく、このツアーがなければ生まれることがなかったかもしれないネグロス内の関係や出会いも、いつかは生産者どうしの連帯につながるだろう。

今回、子どもたちの大きな成長の過程に携る仕事をさせてもらい本当に感謝している。彼らが創り出す未来を想像するだけですごく楽しみだが、この感動とこのツアーの意味を忘れず、次世代を担うすべての子どもたちの未来が明るくなるように、次回のツアーも精一杯がんばりたい。■

03

仙人の雑読・濫読 06

秋山眞兄 / あきやま・なおえ
APLA共同代表

原発事故による子どもたちの被曝と大地の汚染の深刻さと、責任をもつべき者たちの対応を思うとなんともやりきれない。そのようななか、APLAが交流を深めている二本松の大内信一さんをはじめとする農民たちは、大地の力を信じ、様々な問題を抱えつつも忍耐強く農業を黙々と続けている。1年前の作品ではあるがDVD『それでも種をまく』（国際有機農業映画製作で大内さんの声を聞いてもらいたい。

大地の回復に思いを馳せて

大地の回復については、内村鑑三の『デンマルク国の話』（『後世への最大遺物・デンマルク国の話』2011年、岩波文庫を思い起こす。原因や時代・社会状況も全く異なるが、ダルガスという工兵士官が、荒廃した国土を緑の野と森林に回復させていく話である。もちろん、事はすんなりとはすすまず、忍耐と工夫の積み重ねで徐々に実現していくのである。内村は「世に御し難いものとして人間の作った砂漠のごときはありません。……天然の砂漠は水をさえこれに注ぐを得ばそれでじきに沃土となるのであります。しかし人間の無謀と怠慢となりし砂漠は、これを回復するにもつとも難いものであります。……詩人のシラーのいいごとく、天然には永久の希望あり、壊敗はこれをただ



『木を植えた男』ジャン・ジノン原作 フレデリック・バック絵 寺岡 義嗣 (あすなろ書房)

人のあいだにおいてのみ見る」と記している。

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい? 12

04

『山猫』 (1963年、イタリア/フランス)
【監督】ルキノ・ヴィスコンティ 【出演】バート・ランカスター、アラン・ドロ

重政栄一郎 / しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー



『山猫』
発売元：紀伊國屋書店
価格：5,040円(税別4,800円)

舞台は1860年、変革期のイタリア、シチリア島。主役は長年シチリアを統治する名門貴族の家長、サリーナ公爵。イタリア統一と腐敗した貴族支配からの解放を目指す革命軍がシチリアにも押し寄せる……。誇り高く聡明なサリーナ公爵は、戸惑いつつも時代の変化と自らの老いを悟る。新時代に自分の居場所を見出せない彼は甥のタンクレディを支援する。若き野心家のタンクレディは激動する時代を抜け目なく渡り歩き、成り上がることを目指す……。時代の変化、老いと孤独、没落する貴族と新興勢力の勃興、世代交代、そして喪失が描かれる格調高い傑作だ。映画後半に延々と続く盛大な舞踏会のシーンは絢爛豪華であればあるほど寂寥感が漂い、哀しさが増す。

「Things will have to change in order that they remain the same. (変わらなければ、変わらなくてはならない。)」サリーナ公爵の信念である。人が動き、

情報が行き交い、時ともに新たな技術や知識が生み出される。野心や欲望(あるいは理念や「大義」を抱く人物は常に現れ、社会の変革・変貌が留まることはない。過去の栄光や成功体験に胡座をかき、歩みを止めた者や組織に未来は無い。まして既得権益にしがみつき、他者の歩みを阻害する行為は醜悪だ。変わらざるに在るためには、不断の努力が必要なのだ。タンクレディは絶世の美女アンジェリカと恋に落ちる。彼女への恋心は本当であろうが、それだけでは無い。彼女は新興ブルジョワジーの娘である。没落貴族の息子で金に窮するタンクレディは彼女の父親の財にこそ惹かれたのである。彼女の父親もまたタンクレディの血筋や人脈を利用して更なる金儲けを企む。時代が変わる前であれば、身分の違う二人の結婚など有り得なかつたはずだ。経済のグローバル化が進む21世紀の現代でも同様の事例は事欠かない。「先進国」の凋落した名門企業が「後進国」の新興企業に買収される。世界は均質化と格差拡大が同時に進み、底辺への競争はさらに激化している。時代の流れ、社会の変化に取り残される者が出るのもまた世の常である。特に社会的弱者。そのような人びとの対応にも社会の叡智が問われる。

変わらないでいるためには……

01

水俣と日本の今 その6

原田利恵 / はらだ・りえ
環境省国立水俣病総合研究センター研究員



「米須地区村丸ごと生活博物館宣言」『広報いとまん』No.559、2012年3号より。2列目右から4人目が吉本さん。

天野さん、松本さんら若手地域リーダー(コラム)を育てたのは、地元の水俣哲郎さんです。元水俣市職員で、疲弊した地域の再生に取り組んできました。

水俣病について、よそから学者や記者が来て調べましたが、水俣市民の理解は深まりませんでした。「調べた者しか詳しくならない」と、1990年頃から、地元の人による地元調査を始めます。水俣病で苦しんだ網元の杉本家と交流を始め、壮絶な家族史から生まれた思想と笑いが「ないものねだりではなく、あるもの探し」「愚痴から自治へ」といった地元学の哲学へとつながっていきます。地元学で大事なものは、外の人から教えずに、やりすぎないこと、お金をかけず、知恵を絞り、汗をか

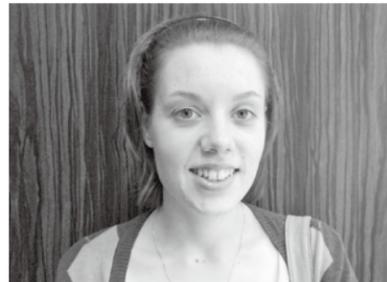
未来のために過去を振り返るー生きる希望をつくるために

くこと。そこに「感動がある」と言います。補助金頼みの事業からは「感動」は生まれず、補助金漬けの地域に「自治」は育ちません。吉本さんは、地元学について「たった一人のおばあちゃんに、昔食べておいしかったというひえご飯を食べさせてあげたい。それがおれの地域づくりに。小さなことが大事。そこに大きな世界がある」と教えてくれました。地元学で全国をまわる吉本さんは、福島県相馬市の支援にも入っています。「福島野菜は買わない」と言われ涙ぐむ農家の方に「あなたは水俣のものを買いますか?」と問いかけ、「覚悟して、本物をつくるしかない」と答えました。相馬の地域リーダーから「水俣の経験を聞いて、これからの相馬の人たちの苦難の道を考えて涙が出てきた。でも希望はあると分かった」と言われたそうです。

最後に吉本さんの言葉を紹介して、本コラムを閉じたいと思います。「人は前にボールを投げるために、後ろにいったん振りかぶる。人は上に高く飛ぶために、下に一度かがむ前や上を未来、後ろや下を過去だとすれば、人は未来のために過去を振り返る、ここに生きる希望をつくるために。」

02

マイストーリー ジャパン 日本に住む在日外国人たち 【第六回】



テオドラさん、渋谷にて。

ルーマニア・テオドラ・ミハイさん / Teodora Mihai
聞き手：赤石優衣 (APLA事務局)

日本から飛行機で約18時間。東欧に位置するルーマニアから、はるばる日本にやってきたテオドラさん。現在東京外国語大学の3年生として勉強をしている彼女は、ルーマニア革命の起こった1989年に生まれた。さすがに当時のことは記憶がないというが、第二次世界大戦後のルーマニア共産党による独裁時代のことは親から聞いたことがある。当時は食料不足が問題で、特に肉類や甘味、タバコやバターなどは入手困難で、闇市場も存在し、彼女の両親も食べものを買うのに苦労した。突然の停電もしばしばあり、たとえ電気が通っても、テレビから流れる映像は共産党の演説ばかりで、洗脳されている感覚になったという。当時は共産党に関わる専任の応援者もいた

が、一般の人びとも政治のポランティア活動が強いられる。さらに、政府を批判する会話をしたらセクリタテ(秘密警察)に通報され逮捕されてしまう人も。そのため、家族内でも政治の話はしづらかったという。そのような状況に反共主義の動きが徐々に生まれ、1989年、ソ連の衛星国である東欧各国での共産党政権打倒をきっかけに、ルーマニアでもついに共産党が崩壊した。

その後すぐに生活環境がよくなったわけではないが、学業に努められる環境ではあった。ルーマニアでは、英語と仏語を主に学ぶそうだが、彼女はそれに加え、日本語を勉強した。高校時代には国際交流プログラムで5カ月間日本に滞在。日本が好きになり、その後、国費外国人留学生の日本語テストに合格して日本へ来た。現在は日本ルーマニア音楽協会でのポランティア活動にも熱心だ。

そんな彼女の夢は「通訳士」。初めて会った時、こんな上手に日本語を話す外国人は見たことがない!と思っただけに、日本語を勉強して、来日4年目でこれだけ流暢に話せるのであれば、きっと素晴らしい通訳士になり、ヨーロッパと日本を結ぶ架け橋となってくれるだろう。

今回のお題

エコシュリンプの20周年を記念して ロゴをつくりました!

レポーター
荻沼 民 / おぎぬま・たみ
（株）オルター・トレード・ジャパン 事業部商品課



ロゴ作成者、
ヘンキー・サトリアさん。

「エコシュリンプ」のロゴは、ヘンキー・サトリアさんがつくった。この20周年を記念して、今年10月にエコシュリンプ生産者を日本に招いた交流企画やエコシュリンプの販促企画などをおこなっています。

ヘンキーさんは1986年、シドアルジョで生まれました。大学ではコンピューターを専攻したそうだが、大学卒業後に就職したATINA Aでは、毎日オートバイで池を駆け巡り、エビの養殖について池主や管理人と話し合い、確認をする監査員として、データを集める仕事をしていました。最初は、エビの養殖が朝早くにあることが多く、早朝から養殖池に行かなければならないことがツライなあとと思ったそうですが、今は野外の活動が中心なこの仕事を気に入っているとのこと。もともと専門

だったコンピューターには、仕事を離れたオフの時にかじりついているそうです。趣味は小さな頃からイラストを描くことだったそうで、その才能はATINAでも群を抜いています。プレゼンテーション用のイラストは、いつもヘンキーさんにお願いしています。

今回のATINAからロゴ作成を依頼したときも、迷わずヘンキーさんをお願いしました。さて、そのロゴにはどのような意味が込められているのか、ヘンキーさんに聞いてみました。「真ん中の擬人化されたエビは、20周年にちなんで、20歳という節目を迎えた成年」を表しており、ポーズは若く躍動的な精神を模している。同時にそれは、『エコシュリンプ事業をより良いものにしていく』という前向きな気持ちを表象している。エビの後部でハート型に手を結んでいる人物ロゴは、つくる側と食べる側を表している。その二者が手を取り合っ

て、両者の互恵の関係と互いへの尊重の気持ちを表すとともに、今後も協力し合いながらエコシュリンプ事業を進めていくというエコシュリンプの原理を示している」ということです。

池で毎日エコシュリンプに接しているヘンキーさんが、エコシュリンプが紡ぎだす人と人との関係の思いをしっかりと受け止めていることがわかります。ヘンキーさんのイラストの先生は『ナルト』や『ワンピース』などの日本のアニメ。若い世代が好きなアニメ感覚で描かれた、躍動感あふれるロゴで、エコシュリンプもますますの飛躍をめざします!



ヘンキーさんが作ってくれたエコシュリンプのロゴ。

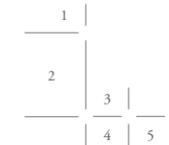
環境にやさしく、安心・安全なエビを私たちの手に! という願いで始まった、エコシュリンプの事業が始まってすでに20年の歳月が流れました。販売元である株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)では、20周年を記念して、今年10月にエコシュリンプ生産者を日本



夢や目標に向かって努力を重ねる同世代のK-POPアーティストを見てパワーをもらい、ゆっくりとした時の流れのなかで身体も心も癒され、大切な人との絆まで深められる。私にとって新大久保はそんな街です。

- 1 — K-POPは日本でも大人気!! なぜこんなに人気なのでしょう? 夢や目標に向かってひたむきに頑張る姿に「自分も負けてられないな!」と前に進むパワーをもらえるからではないかと私は思います。
- 2,3 — 新大久保では、韓国の文化に浸れるのも魅力のひとつ! この写真は、韓国の伝統茶がいただけるお店。伝統的な雰囲気の店内では、ゆっくりとした時間が流れています。体に良い韓国伝統茶を飲みながら、心も体もリフレッシュできる空間がここにはあります。
- 4,5 — 新大久保は大切な人との結びつきを深めることができるという点も魅力だと思います。この日は、敬老の日のお祝いに、祖母と一緒に韓国料理を食べました。韓国料理は、もちろん一人で食べても美味しいのですが、大勢で様々な料理を分けながら食べると楽しさが倍増!! 韓国で人気のデザート「ハピネス」も大きなひとつのボールを何人かで一緒に食べるのが主流。みんなで同じボールを突きながら食べると不思議と心の距離が縮まる気がします。

(2012年6月~9月撮影)



このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容○アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぷら事務局(Tel:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募お待ちしております!

今年、二つほど小さな太陽光発電施設づくりに関わった。一つは福島県三春町と一緒に「農と食」の再生に取り組んでいる農業女性グループの農産加工施設。「原発の足元で原発いらない」を発信したいという女たちの思いが実ったものだ。もう一つは千葉県三里塚でみんなが集まり泊まったりできるひろばとなっている家。こんな小さな小さな発電所を全国につくりたい。「全国農漁民発電網」を立ち上げることにした。(大野)

6回続いたコラムの連載が今回で終了となります。今回の「水保と日本の今」で触れている地元学。そこで話されていることは、常々アジアの仲間たちに接するとき、肝に銘じていることと同じでした。外のもの、地域にいる人。そこにはいつも難しさもあるけれど、出会った「たった一人」の人に何かしたい、それでいいんだ、と、お会いしたことはないのですが、吉本哲郎さんに教えていただいた気分です。また次号より新しいコラムも始まります。乞うご期待。(吉澤)

昨日、特集記事を寄せてくださった波多江さんから、伊藤忠商事に対してイザベラ州でのバイオエタノール事業に関する公開質問状を提出したとのメールをいただいた。質問状では、問題の解決が進まない現場状況を憂慮し、現地企業任せでない積極的な関与を促すとともに、砂糖キビ栽培地の確保や農業労働者の労働条件、工場の操業に伴う新たな問題、現地住民との対話についてなど、4週間以内の回答を求めているとのこと(詳細はFoE Japanのウェブサイトに掲載)。今後の動きを注視したい。(野川)

ハリナ HALINA

2012年 vol.02-no.18
2012年11月1日発行

【編集長】
大野和興

【編集者】
吉澤真満子、野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人 APLA
(APLA/あぷら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

【事務局だより】

事務局の動き(2012年7月～10月)	
7月 19日～ 23日	ATC / KF-RC / ATJ / APLA協議会が開催され、秋山と大橋が出席しました。
7月 26日～ 8月 2日	グリーンコープ共同体の青少年ネグロス体験ツアーが実施され、大橋、吉澤、赤石が同行しました。
8月 30日	BMW技術協会・若手幹事に吉澤が参加しました。
9月 1日	「福島百年未来塾」第4回を開催しました。
9月 2日～ 28日	東ティモールに野川が出張しました。
9月 7日、 8日	第5回BMW技術協基礎セミナーに吉澤と赤石が参加しました。
9月 11日	エネルギー勉強会に吉澤が参加しました。
9月 13日～ 18日	グリーンコープ組員 fromネグロスツアー／東ティモールが実施され、野川が同行しました。
9月 29日	APLA理事会開催。
10月 11日	エネルギー勉強会に野川が参加しました。
10月 14日	東ティモール日本文化センター(TNCC)主催の第6回「希望の島★東ティモール」に吉澤と野川が参加しました。
10月 19日	和光大学の授業でAPLAの活動について吉澤が講演しました。
10月 20日、 21日	福島県三春町「収穫祭2012」に実行委員会として参加しました。
10月 23日	WE21ジャパン相模原で野川が東ティモールの活動報告を行いました。
10月 27日	フォーラム・アソシエの第8回アソシエーション文化祭に赤石が参加しました。
10月 27日～ 28日	互恵のためのアジア民衆基金(APF)の第3回会員総会に秋山、吉澤、野川が参加しました。
10月 29日～ 11月 1日	グリーンコープ地域交流集会、分散交流会に東ティモールからのゲストの同行として野川が参加しました。
10月 31日	WE21ジャパン相模原で大橋がネグロスKF-RCの活動報告を行いました。

事務局からお知らせ

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- 大間原発の建設断念を求める声明に賛同

「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へ引き続きご協力をお願いいたします。

福島県の保育園・幼稚園への配達状況は、ホームページでご確認いただけます(23施設、約1700人の子どもたちへ届けています)。
http://www.apla.jp/bnn_bokin/log.html

APLA会員限定のメーリングリストを不定期に流しています。

まだ登録されていない方はぜひ登録してください(事務局までご連絡ください。info@apla.jp)。

Voice from APLA partners

From Negros, Philippines 【ネグロスより】

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)とオルター・トレード社(ATC)がバナナ生産地の地域多様化にむけて活動開始

現在、ネグロス島では、バラシオンバナナ産地を中心とした地域内の生産物多様化に向けて、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFRC)とオルター・トレード社(ATC)が、連携・協働して活動することになった。

9月10日、11日、西ネグロス州のパンダノン(ドンサルバドル・ベネディクト町)、バイス(ラ・カルロータ市)、カン

ルソン(EMマゴロナ町)の3つの生産者協会の代表34人がKFRCに集合し、KFRCの循環農業を見学し、泊まり込みの会議を開いた。西ネグロス州で良質のバナナを生産し、生産者協会をつくっているこれら3カ所のバナナ生産者たちが交流するのは初めての試み。KFRCを2時間以上かけてじっくり見学し、豚舎から出る消化液(スラッジ)がバイオガスやBM活性水、さらに堆肥として全部循環するシステムに関心と質問が集中した。さらにラムポンプが、灌漑、養殖池、豚舎・セミナーハウス用と多岐に利用されて



KF-RCの豚舎を見学。



バイスの地域計画づくりの様子。

From Papua, Indonesia 【パプアより】

パプア産のカカオを題材にしたブックレットとDVDが完成

いる様子を興味深く見学していた。

また、このKFRC訪問のあとには、KFRCとA

2012年秋、パプアから、日本に向けてカカオが出荷された。株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)が取り扱う予定の新しい民衆取引の商品であるチョコレートとその原料のカカオだ。

「パプア」というと、パプアニューギニアのことを思い浮かべる人が多いと思うが、パートナーとなるカカオの産



カカオの集荷風景。



立派なカカオを手に。

TCのスタッフがバイスとカ

ルソンを訪問し、これからの具体的な計画づくりがすす

められた。今後、養豚を中心

地はインドネシア領パプア。初めて耳にした人も多いのではないだろうか。パプアとはどんな地域なのか、どんな人たちがどんな思いでこのカカオの民衆取引を始めることになったのか、その一端を知ってもらうために、APLAではブックレットとDVDを作成した。2011年9月の現地取材から、1年もかかってしまったが、DVDは、パプアのカカオ産地の様子を感じてもらえるものにできあがった。ブックレットは、身近な

に、それぞれの地域に適した形での取り組みが始まる。(APLAフィリピンデスク・大橋成子/編集部まとめ) ■

お菓子・チョコレートについての歴史や産業の現状、原料となるカカオの基礎情報など、写真やイラストをつかってわかりやすく解説している。普段何気なく口にしているチョコレートのその先をみつめ、食べものをつくる生産者と自分たちとの関係について考えるきっかけとなることを期待し、また新たな民衆取引の仲間となるパプアの人びとのことをぜひ知っていただきたい。(APLA事務局・吉澤真満子) ■